

# 音楽を伴った体験型ソーシャルスキル トレーニングの開発と研究

長田有子 (チャイルドリサーチネット 研究員)

## 臨床発達心理学を踏まえた音楽療法

平成17年4月から施行されている特別支援教育法では、発達障害を早期に発見し、個人に対応した支援を図ることをうたっている。しかし、早期治療における具体的な支援方法や治療方法が確立されておらず、地方自治体には援助する外部機関や専門家が少ないのが現状である。支援のための新しい教材や学習方法を開発し、さらに個人に対応するプロフェッショナルな教え方をどのように展開するかが早急な課題である。

従来の音楽療法は、クライアントとセラピストとのコミュニケーション活動を中心とし、関係を深めることや、運動に音楽を用いて感覚運動機能の発達を促すことや、また精神病をもつ患者に音楽によってリラクゼーションさせる精神的心理療法として行われてきたが、子どもの発達を臨床発達心理学的背景から捉え、発達の課程にあわせた構造的で統合された課題が未開発であった。本研究においては、その未発達の分野における音楽を用いた学習支援課題を開発し、さらに個人の差異に添った個別プログラムを作ることを目指し、どのように治療教育を構造的に組み立てるかを研究した。

本研究は、2000年からチャイルドリサーチネット研究所によって行われた実験研究から始まり、東京都永山市の廃校になった小学校の「ちーきち」という場を活用して続けられた。そこで開発された新しい教育ソフトや実践方法は発達障害をもつ子どもや虐待を受けた子どもたちへの治療教育の場で実践し、その効果を検証した。子ども学の視点をふまえながら、子どもにとって受け入れやすいメディアや音を手がかりとする発達支援課題を各領域（学習、視覚、聴覚、行動・情緒、社会スキル）で制作することを目的とし、臨床の場において実践し、その有効性を実証した。

言語的指示によっても指示理解が困難な障害児にとっては、言葉による指示や解説だけで社会性や集団性を理解するのは困難であり、多様なメディアを活用し、学習そのものを興味のある対象として楽しいものにするのが求められている。音を用いた課題は、多

様なメディアと複合し、子どもに興味をもたせることが可能となり、さらに音楽のもつ特性により記憶、想起しやすい課題となり、表象を生み出しやすくし、支援を可能とする。これらの課題は教育工学技法と人のもつ聴覚に対する生理的しくみを用いて制作され、学習支援のみならず、社会スキルを向上させる有意性をも導き出すことができた。

音楽を用いた学習支援課題として、①言語能力系教化課題（文字・識字、逐次読み、特殊音節、漢字の読み、ひらがな書き、漢字の書き、絵画配列、歌による言語）

②数的能力系教化課題（数概念、数字、大小、加算、引き算、数唱、形態概念）③視覚系能力教化課題（目と手の協応、空間位置、視覚的記憶、視覚的注意）

④聴覚系能力教化課題（聴覚的注意、聴覚的記憶、音の聞き分け、音から字への変換）⑤運動系能力教化課題（姿勢の保持、筋力、全身の協応、道具を介した協応、左右の協応、バランス）⑥行動・情緒系能力強化課題（指示の受け入れ、緊張、こだわり、多動性、衝動性、無気力の抑制）⑦社会スキル系能力教化課題（対人関係、共感性、協調性、価値意識、社会的責任の体得）の個々について、課題を制作した。

セッションは、1時間内に複数の課題を切り替えながら実行するために集中が途切れることなく発達のレベルによって進行していくように構造化した。

## 新しい発想と臨床デザインによる成果

本研究において識字、数概念を習得することが困難であった障害児において音や音楽を用いた課題を実行することにより、学習の習得、またソーシャルスキルの習得が可能となった。5歳児の知的障害児は4年にわたるセッションにおいてIQ38（田中ビネー検査）からIQ60へと知能指数が飛躍的に向上し、学年相当の漢字を記憶し、かけ算、わり算も理解し、安定した情緒を獲得し得た。また4歳時において自閉症と診断されたある子どもの症例では、津守式発達検査においてPA41であり、言語性1歳9ヶ月であったが、6歳時にこの療法を開始し、4年後の10歳時にはWISC

言語能力系教科内容

文字・読字支援

つ

う

リズミに合わせて「つ」「う」を練習し、音節に合わせて文字を覚える。  
「つ」は左から右へ、「う」は上から下へ、順番に書く。  
ローマ数字の丁寧な書体から始め、子どもによって音節に入心することを可能にする。

「へ」と「ひ」が、似た音で区別が難しい。へびの出ている音のイメージを、音のイメージがわきやすい。

このように書くことで、音と文字が結びつきやすくなる。

社会系教科内容

行動・情緒支援

自己表現する機会に、集団の中で自分が大きな声で話さなくても、自分の気持ちを伝えることが出来るようになる。  
子どもの声をマイクで取り、ソラノ外の音が声の水ありに反応して成長して花を咲かす。  
このソラノでは、声の大きさに応じて、音や電報、飛行機が飛んたがる。

社会系教科内容

短期記憶課題

リズムに合わせて10個の暗記を視覚的・聴覚的に繰り返すことにより、UFOの暗記物を覚えることができる。

社会系教科内容

聴覚記憶支援

日常のいろいろな音を注意深く聞く課題。  
料理の音だけを聴いて作っていき。

何をしているのか？  
誰かな？  
よく聞いてみて！

野菜を洗っている音だよ！

ポテトができたよ！！

一Ⅲ（ウェクスラーⅢ）の知能検査において言語性94、動作性103、全検査98の成長となった。その他のアスペルガー症候群児、自閉症児においてもめざましい発達を成し遂げることができる研究となっている。

集団セッションにおいてはセッション前と後に検査を行い、ノンパラメトリックのWilcoxon検定（統計学上少人数でも有効性を導き出す方法）を行った結果、ADHD、アスペルガー症候群などの友達と関わりを持つことが困難な軽度発達障害を持つ子どもに対する集団セッションにおいて10回の体験型ソーシャルスキルトレーニングにおいては、学習スキル、社会スキルが向上において統計的に $P < 0.05$ の有意性を示した。

また、被虐待児に対する集団セッションにおいて7回の体験型ソーシャルスキルトレーニングにおいては、社会スキル（協調性）、視覚領域（形の区別、視覚的注意、視覚的記憶、空間位置の区別）、聴覚領域（聴覚的記憶、音の聞き分け）、粗大運動（同じ姿勢の維持）、行動・情緒（多動性）において統計的に $P < 0.05$ の有意性があった。さらに学習スキル（読解）、聴覚領域（聴覚的注意、音から字への変換）、行動・情緒（過度の緊張）においての統計的に $P < 0.10$ の有意な傾向が認められた。

本研究はまったく新しい発想と臨床デザインを用い、実行した結果、障害児と被虐待児の知能開発およ

び行動変容の効果をもたらした。子どもの発達の可能性について最新の発達科学の研究を取り入れ、個人の知的能力に適応した分析を行い、適宜な療法を行うことが可能となった。現在、私の発達支援教室において現在4年生WISC一Ⅲの知能検査にIQ40の知的障害児が学年相当の漢字や計算を習得している姿を見ていると、知能検査だけで学習をあきらめてしまう現在の教育に疑問を持たざるを得ない。音や視覚的メディアを使用することから子どもがおもしろいと思う情動に働きかける特性をもつ課題により、扁桃体LTPが学習情動に深く関わり知能を発達させることができるものと思われる。

現在、文部科学省において特別支援教育が始まり、子どもの興味にあった具体的学習方法が検討されているが、今後、本研究によって開発された課題が、広く個々のクライアントの学習の向上、集団性・社会性の発達、行動・情緒の安定、支援に活用されることを期待する。

体験型ソーシャルスキルトレーニングの講座を指導者向けに行っているため、興味のある方はご連絡ください。Yuko-osada@jcom.home.ne.jp